慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岩倉使節団とイギリスの教育：使節団の教育機関視察をめぐる考察
Sub Title	The Iwakura Mission and the Visits to Educational Institutions in Britain
Author	太田, 昭子(Ota, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.1 (2009. 1) ,p.141- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090128-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岩倉使節団とイギリスの教育

——使節団の教育機関視察をめぐる考察——

太田昭子

はじめに
一　岩倉使節団の視察したイギリスの教育機関
(一)　岩倉使節団本隊と教育視察関連の日程
(二)　使節団の視察した教育現場——その特徴と位置づけ
二　教育機関選択の背景と岩倉使節団の評価
三　むすびにかえて——まとめと今後の課題

はじめに

明治四年十一月十二日（一八七一年十二月二十三日）[1]に横浜を出港した岩倉使節団は、欧米諸国を歴訪し明治六年九月に帰国した。明治維新後まだ日の浅いこの時期に、明治政府首脳がこれほど長期間にわたり海外歴訪の旅を続けたのは驚異的なことであり、またそれゆえに岩倉使節団の歴史的意義が幅広い分野から賛否両論交えて議

論されている。尤も、使節団は最初からこのような長期間の旅程を組んでいた訳ではない。アメリカ合衆国では大雪による遅延と条約改正交渉をめぐる不手際が一行のアメリカ滞在を長引かせた。そして二番目の訪問国イギリスでは、ヴィクトリア女王のロンドン帰還を待ち、結果的に約四か月間滞在することになったのである。しかし使節団は予想外の長期滞在を無駄にはしなかった。アメリカ滞在中にアメリカ憲法の翻訳や解釈の作業に取り組んだように、使節たちはイギリスの長期滞在も有効に活用し、イギリス各地をくまなく巡って行政機関、産業施設をはじめとする諸施設を見学する一方、産業資本家たちとの交流も積極的に行なったのである。当時の世界経済・産業におけるイギリスの地位の高さを考え合わせると、これが日本の近代化を推進する上でまたとない好機となったことは言うまでもない。

岩倉使節団のイギリス滞在において産業視察が極めて重要な位置を占め、そこで得た情報は日本の殖産興業政策に大きく貢献した。それと併行して使節たちは全ての分野に網羅的に目を配り、視察することも怠らなかった。教育機関の視察も歴訪国で使節団の旅程に必ず含まれていた重要項目である。しかしイギリスで訪問した学校を追跡するうちに、一つの特徴が浮かび上がってきた。イギリスでは一般的な学校とは趣を異にする教育機関への訪問が中心になっていたことが、久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』(2)（以下、『実記』または『米欧回覧実記』と略記）などの記録から明らかになったのである。それはごく一般的な小中学校の訪問が中心となったアメリカ合衆国など他の諸国と大きく異なる点であった。

本論文では、岩倉使節団がイギリス滞在中に視察した教育機関に注目する。使節団本隊の訪れた学校の特性を明らかにした上で、何故そのような選択がなされたのか、それらの教育機関が当時のイギリスの教育にどのような位置を占めていたのかなどの背景を探る一方、岩倉使節団の評価やこれらの視察と日本の教育政策との関わりを論じたい。岩倉使節団が見たもの、見ようとしたもの、そしてイギリス側が見せようとしたものを検討するこ

とにより、近代日本史研究に新しい切り口を提供するだけでなく、イギリス史研究の枠組から論じられるヴィクトリア朝社会の一側面を、近代日本対外関係史のコンテクストと絡めながら明らかにするのも本稿の狙いである。

一　岩倉使節団の視察したイギリスの教育機関

(一)　岩倉使節団本隊と教育視察関連の日程

岩倉使節団は、明治五年七月十四日（一八七二年八月十七日）にリヴァプール到着後、直ちにロンドンへ向かった。ロンドンに到着した翌々日の七月十六日、岩倉具視らはグランヴィル外相と会見したが、ヴィクトリア女王が避暑でスコットランドにて静養中のため謁見は延期された。それから女王謁見を待つまでの約四か月間、岩倉具視らは条約改正問題をめぐりグランヴィル外相らとの会談を行なう一方[3]、ロンドンをはじめイギリス各地を視察したのである。イギリス王室や政府要人たちの姿勢は必ずしも温かなものではなかったが[4]、地方の訪問先で一行は産業資本家や貴族など各地の地元名士たちに厚遇され、イギリスへの理解を深めることとなった。

岩倉具視をはじめとする使節団本隊は、どのような教育機関を訪れたのだろうか。『米欧回覧実記』、『木戸孝允日記』[5]（以下、『木戸日記』と略記）や当時の現地新聞資料[6]を始めとするイギリス側の史料から旅程に沿って彼らの足取りを簡単にたどってみたい。尚、イギリスでは理事官たちが各専門分野の視察に専念すべく別行動をとり、必要に応じて使節団本隊に合流するようになっていた。教育制度視察のため文部理事官として岩倉使節団に加わっていた田中不二麿と補佐官たちも同様である[7]。本稿が主として取り上げるのは、岩倉具視や副使たちと随行を中心とする使節団本隊の動きである。

『実記』にイギリスでの学校視察が初めて登場したのは、明治五年八月十五日（陽暦九月十七日）。この日、岩

倉たちはイギリス側の接伴係の一人アレクサンダー氏の案内でロンドン市内の小学校と併設の幼稚園を訪れ、男女共学の小学校[8]でカリキュラムの説明を受けた。そして「倫敦ニアル内ニテ、学校ヲ見タルハ、唯此一ケ所ナリ」（二、一〇一頁）と述べた上で、「英吉利国総説」で論及したイギリスの教育紹介を補足する記述を若干付け加えたのである[9]。

しかし実際には、岩倉使節たちのロンドンでの学校視察は、前述の小学校一校だけではなかったようである。『木戸日記』に「学校に至る於于此メヤーに面会し同人の誘引にて学校中を一見す当時は生徒二百人余九歳より十五歳までは八百人と云校内に水遊の所あり是又米国にて不見ものなり」[10]と記されているように、使節団の主要メンバーはロンドン市長に案内され、八月九日（陽暦九月十一日）クライスツ・ホスピタル（Christ's Hospital）というパブリックスクールを訪れているのである。一八七二年九月十二日付 *The Times* の記事によれば、市長公邸で一行を出迎えたロンドン市長自らが、クライスツ・ホスピタル校、セント・ポール大聖堂、イングランド銀行、ギルドホールなどを案内し、市長主催の午餐会にはイングランド銀行総裁らも同席した。使節たちは、クライスツ・ホスピタル校の財政基盤に関心を示し質問もしたという。八月九日付『実記』に「午後ヨリ王厩ヲ観ル」（二、九五頁）としか記されていない理由は明らかではないが[11]、ここではむしろクライスツ・ホスピタル校の特徴とそこに案内したイギリス側の意図に注目したい。

クライスツ・ホスピタル校の歴史は古く、一五五二年に国王エドワード六世がロンドン市長らに働きかけ、向学心のある貧しい家庭の子供たちのために設立した全寮制のパブリックスクールである。家庭が経済的に苦しい児童にも進学の機会を与え高水準の教育を受けられるよう取り計らうという慈善の精神が建学当初の理念であり、早くも一五六〇年代にはオクスフォード、ケンブリッジ両名門大学に進学する奨学生を送り出したという。「パブリックスクール」は本来、'open to the public' すなわち民に教育機会を与える慈善の精神で誕生した学校だ

ったが、十九世紀にはそれらの多くが上流階級の子弟の通う名門校になっていた。次の世代にはジェントルマンの仲間入りをして欲しいと願った産業資本家たちが子息たちをこぞってパブリックスクールで学ばせようとしたため、十九世紀半ば以降のイギリスでいわゆる「第二次パブリックスクール・ブーム」が興隆したことは、ヴィクトリア朝研究ではよく知られている現象である。しかしその中にあって、クライスツ・ホスピタル校は、例えばイートン、ラグビー、ウィンチェスターなどの名門校とは一線を画する存在だったと言えよう。使節団が訪れた一八七〇年代も、同校は建学の理念を継承し、学校経営は多数の慈善家の寄付により成り立っていた。[12] また、地域社会と隔絶された閉鎖的コミュニティーを築いていたパブリックスクールも少なくなかった中で、クライスツ・ホスピタル校はロンドン市長やロンドン市との結びつきが深く、その意味でも独特な存在だったのである。更に木戸が「校内に水遊の所あり是又米国にて不見ものなり」と述べているところからも、イギリス側がアメリカ合衆国で岩倉使節団が見学したであろう教育機関とは一味違う学校を見せようとしていたことがうかがわれる。

明治五年八月二十七日（陽暦九月二十九日）、岩倉使節団本隊はイギリス各地の旅に出発した。[13] 最初の訪問地となったリヴァプールで、一行は工場視察の傍ら、四艘の「船学校」を巡覧している。[14] マンチェスターでも、工場見学が視察の中心となった。綿紡績と織物工場を視察した久米は、『実記』の中で製造工程の一部始終と児童が労働に従事する様子などを伝えているが、[15] 主な関心は産業技術に向けられていたようで、労働環境については「職人ヲイル、九百人、其内ニ婦人、幼童、大半ニオル」（二、一七三頁）と述べ、児童労働者の仕事ぶりを淡々と綴るに留まった。それに対し、木戸は労働者の週給制の賃金区分に触れた上、「尤可感は十四五歳已下のものは五字間職に働き三字間学校に容る、規則也社中には学校を設けり他の製造所にても学校に至らざるものを雇ふを禁せり」[16]と、工場内に併設されていた学校の役割にも注目していた。工場内に併設された学校については、工場法の歴史や他の地方で使節団が視察した施設などと絡め、次節で詳しく論じたい。マンチェスター滞在最終日

となった九月六日（陽暦十月八日）、一行は「オウン」学校も視察した。この「オウン」学校がマンチェスター市内にあり、一八七二年当時、設立二十年ほど経過し、学生数が三百人余だったこと、化学の授業が行なわれていたことや、使節団と教員たちとの談話内容から、一行が訪れたのは現在のマンチェスター大学の前身 Owens College（オウェンズ・コレッジ）ではないかと推測される。[17]

岩倉たちはマンチェスターから北上し、スコットランドへ向かった。滞在中の訪問先は工場見学から貴族の館まで多岐にわたったが、[18] スコットランドで岩倉たちは初めて大学を訪れている。[19] グラスゴーでは「園前ニ哥羅斯哥「ユニヴァルシチー」アリ、此大学校ニ生徒ヲイル、一千三百人、高名ナル学校ナリ」（『実記』(二)、一九八頁）という言及にとどまったものの、エディンバラでは実際にエディンバラ大学を訪問したのである。[20]

ニューカースルに南下した使節団一行は、同地でアームストロング砲の製造工場はじめ多岐にわたる工場や炭鉱を視察し、九月二十一日（陽暦十月二十三日）タイン川河口で再び「船学校」を見学した。[21] 更に当時の繊維産業の中心地帯にあるブラッドフォード、ソルテア、ハリファックスを訪れた岩倉たちは、工場見学の傍ら、九月二十三日（陽暦十月二十四日）にソルテア、翌二十四日（陽暦十月二十五日）にハリファックスで学校を視察している。[22] イギリス西北部から中部に広がる工業地帯を巡覧した岩倉使節団は、バーミンガムでもガラス工場内に設けられた学校を訪れた。[23]

十月九日（陽暦十一月八日）夕方、ロンドンに帰着した一行は、その後一か月余のロンドン滞在中、十月二十八日（陽暦十一月二十八日）にロンドン市内の病院を訪れ、附属の看護学校も見学した。[24] しかし、それ以外には教育関連施設の視察は『実記』には残されていない。そして明治五年十一月十六日（陽暦十二月十六日）、岩倉使節団はドーバーから次の訪問国フランスに向かったのである。

イギリスにおける岩倉使節団の旅程には学校以外にも、博物館・水族館・動物園などの見学が組まれていた。

これらは広義の教育文化施設であるため、主だった視察先を挙げておこう。イギリス各地の視察旅行に出発するまでの約一か月間のロンドン滞在中、岩倉一行はグランヴィル外相と会見した七月十六日（陽暦八月十九日）午後にケンジントンの国際博覧会会場[25]、その翌十七日（陽暦八月二十日）にイギリス南部のブライトンを日帰り訪問した折に博物館と水族館[26]、七月二十八日（陽暦八月三十一日）にリージェンツ・パーク内の動物園、八月二十五日（陽暦九月二十七日）に大英博物館を訪れた。イギリス各地でも、八月三十日（陽暦十月二日）にリヴァプールで博物館、九月十二日（陽暦十月十四日）にエディンバラで図書館や産業博物館、ロンドン帰着後も十月二十五日（陽暦十一月二十五日）に「農業展覧会」、十月二十九日（陽暦十一月二十九日）に「印度博物館」などを見学している[27]。イギリスでは、美術鑑賞を楽しむより、自然科学系あるいは産業技術に関わる文化施設を訪れ、ここでも何かを学び取ろうとしていた使節たちの姿が、これらの日程から浮かび上がってくるのではなかろうか[28]。

(二) 使節団の視察した教育現場——その特徴と位置づけ

岩倉使節団がイギリス各地で行なった教育関連の視察にはどのような特徴があったのだろうか。第一に、高等教育機関やいわゆる名門校の視察が極めて少なかった点、第二に、本稿の冒頭でも触れたように、他の諸国と異なり一般的な初等中等学校の視察も極めて少なかった点が挙げられよう。それでは、彼らはその代わりに何を見たのだろうか。前述した日程をもとに視察先をグループ分けすると、工場内に併設された学校、その中でもソルテヤなどのように新たに形成された工場村というコミュニティーの中に設置された学校、そして非行少年の矯正施設としての訓練船などが重点的に選ばれていたことがわかる。高等教育機関やいわゆる名門校の視察が少なかったという第一点目については、第二章で取り上げることにして、この節では、第二点目を中心に、当時のイギリスの教育史・社会史の背景に触れつつ、岩倉使節たちが見た労働者階級の教育現場を検討したい。

イギリスでは十九世紀半ばまで国家は基本的に教育に関与せず、いわゆるエリート教育も民衆教育も私立の教育機関が行なっていた。[29] 当時の教育理念を端的に示す、Voluntarism（任意寄付制、「随意制、任意制」とも訳される）や Philanthropy（慈善、博愛）などのキーワードからもうかがわれるように、教育の運営にはキリスト教会が深く関わっており、一般民衆の初等教育は、一六九八年のキリスト教知識普及協会（SPCK）結成以来、キリスト教団体による慈善事業として行なわれていた。[30] 一八一一年に国教会系の国民協会（National Society）が結成された三年後の一八一四年には非国教会系の内外学校協会（British and Foreign School Society）が結成され、慈善の理念に基づく初等教育の普及に貢献した。しかしキリスト教団体を核とした教育には、イギリス国教会系と非国教会系の学校が対立する土壌を育むというマイナス面があったことも否めない。[31] 見方を変えれば、イギリスでは政府の非介入により、十九世紀に入ってからも、公教育整備が遅れていたのである。

余談になるが、久米は「英吉利国総説」でイギリスの教育を概観した際、「千八百十一年ニ始テ、「ナショナルスクール」ヲ建ツ、国立学校ハ是ヨリ始レリ」（『実記』㈡、四二頁）と記したが、ナショナルスクールは国立校ではなく、前述したとおり国教会系の学校を意味していた。久米が同じ総説でイギリスの宗教を概説した際も、「英倫ニテ「エピスコハシー」宗ヲ主トス、所謂英吉利宗ナルモノニテ、其礼拝ノ式等、大ニ天主教ニ類セリ、蘇部ニテハ、「プレスペテリヤンス」宗ヲ主トス、所謂蘇格的（スコット）宗ナリ、愛倫ニテハ羅馬「カドレーキ」教専ラ行ハル」（『実記』㈡、四二―四三頁）とかなり詳しい解説を試みているものの、非国教会の存在には言及していない。イギリス側の説明がなされなかったためかも知れないが、一八七二年当時の日本の状況を考えると、久米や通訳の畠山義成の、国教会と非国教会の関係に対する理解に限界があったのは致し方ないだろう。[32]

産業革命の進展と共に労働者の移動が激しくなり、工場労働者の人口が工業都市で激増するにつれ、教会が教区に住む児童の教育を受け持つシステムは次第に機能しなくなり、政府が教育に関与しない状況が次第に許され

なくなってきた。教会や慈善団体の目が充分行き届かなくなる中、劣悪な労働環境のもとで就労児童の多くは酷使され、疾病も絶えなかった。十九世紀前半の就労児童のうち学校に行けたのはごく一握りだったとされている。深刻な状況が顕在化した一八三〇年代には、国家はそれまでの「関与せず」の姿勢を改め、何らかの政策介入をする必要性に迫られるようになった。言い換えれば、イギリスにおける教育政策の模索は労働政策の一環として始まったと捉えることもできよう。しかし十九世紀前半の関与は決して積極的とは言えず、任せられる所はできるだけ「民間」――すなわち教会やキリスト教慈善団体、工場主など――に任せたいというスタンスが保たれ、一貫性のある政策が打ち出されるには至らなかった。一八三三年の工場法で就労児童に一定の初等教育を施すことが義務づけられる一方[33]、同じ年に義務教育法案は否決され[34]、翌年に施行された 新救貧法（New Poor Law）も労働者を救済する措置とは言い難い内容だった[35]。一八四七年に制定された十時間工場労働法も、運用が工場経営者の裁量に任されていたため、就労児童たちの就学状況は名ばかりに近いものであった。工場内に併設された学校の大半は、教育水準などを云々する以前のレベルにあり、就労児童が勉強する場所というより体を休め居眠りのできる場所に過ぎないというのが実態だった[36]。

イギリスで体系的な教育政策に国家がようやく着手したのは十九世紀後半である。その背景には、アメリカ合衆国やドイツなど産業革命の後発国の追い上げを受け、労働者たちの基礎学力や基礎体力水準の低さが産業面での国際競争力低下につながっていることへの危惧が高まったことなどが挙げられる[37]。一八五六年の改正教育令[38]などを経て、一八七〇年の教育法（通称 Forster's Education Act）により公立小学校が制定されたが、経済的に困窮していた家庭の親たちが子供を学校に通わせることに消極的だったため、一八七六年の教育法で改めて小学校の義務教育化が定められた。日本では明治五年八月に学制頒布が行なわれたことを考えると、イギリスにおける教育政策の整備は明らかに遅かった[39]。岩倉使節団が訪れた当時のイギリスは、一八七〇年の教育法が制定されたわ

ずか二年後の、教育政策の整備も国民皆学の意識形成もまだ途上の時期にあったのである。[40]

しかし、ここで国家あるいは地方行政レベルでの教育政策の整備が途上にあったことのもう一つの側面を見落としてはなるまい。それは、見方を変えれば、一八七〇年代初頭には学校経営に携わる産業資本家の裁量が教育現場に反映され得る余地がかなり残されていたという点である。前述したように、数度にわたり制定された工場法により、就労児童の労働時間の上限と最低限の就学時間が設けられた。無論、営利主義に徹した非情な工場経営者の手にかかれば、就労児童の環境は悲惨を極めるものとなったが、その一方で、「慈善」の精神に富み、労働者の生活環境に配慮した産業資本家の経営する学校の中には、注目に値するものもあったのである。岩倉使節団が訪れたソルテヤ村とその学校は、まさにその中でも特筆すべき存在だった。

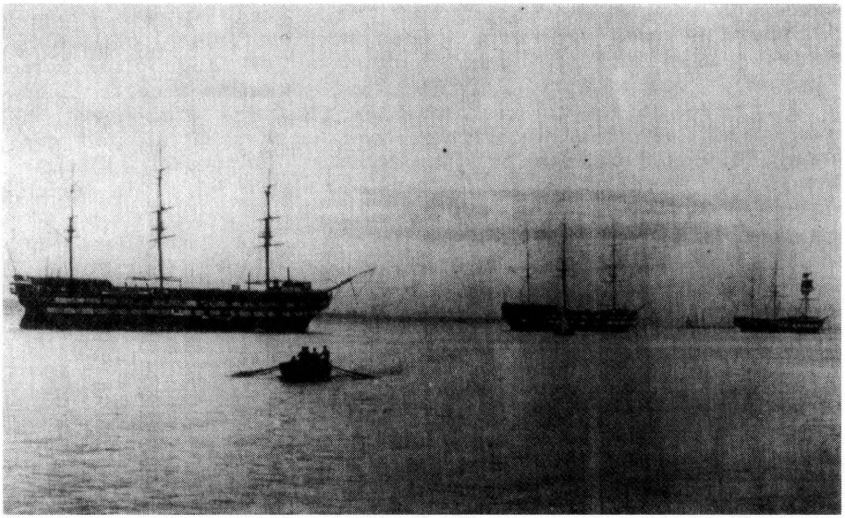
ソルテヤは、ブラッドフォードでアルパカ紡織工場を経営していたタイタス・ソルトが新たに作った、リーズやブラッドフォードなどの工業都市に近い工場村であった。[41] ソルトの工場が操業していたブラッドフォードは、毛織物産業の中心地の一つであったが、急激な人口増と工場の排煙による環境汚染のため、労働者は劣悪な生活環境に置かれていた。[42] 同業者が見向きもしなかったアルパカの毛に注目し、十年も経たないうちにアルパカの紡織産業で大成功をおさめていたソルトは、ソルテヤ村に一大コミュニティーの建設を開始し、一八五三年にブラッドフォードの工場を移転、その翌年から工場関係者の住宅・教会・学校・病院・養老施設などを計画的に整えていったのである。[43] 飲酒の悪影響を嫌ったソルトは村での居酒屋の開業を禁じ、その代わりに村民の社交と憩いの場として、一八七一年に社交クラブ（図書室や講堂を備えた文化施設）と広大な公園を開設した。[44] 岩倉使節団が訪れた学校の創立は一八六八年で、男女別学制で総生徒数は七百五十名ほどだった。多くは紡績工場で働く合間に学校で授業を受ける就労児童だったが、[45] 学校にはセントラル・ヒーティングやガス灯など、生徒の健康状態に留意した設備が導入されていたという。これは当時の労働者階級の児童が通う学校としては画期的なものだった。

一部の産業資本家が工場村を建設する動きは、早くも十八世紀に、木綿紡織産業の発展したランカシャーなどに見られたが、十九世紀半ばには、紡績産業地帯のヨークシャーを中心にその動きが発展していた。[46] ソルトより早い時期に、アクロイド（Edward Ackroyd）やクロスリー（Crossley）一族がそれぞれモデル村を建設したことなどが知られているが、ソルテヤの規模や各種施設の整備水準はそれらをはるかに凌ぐものであった。[47] ソルトのソルテヤ村建設構想にも、他の産業資本家と同様、労働者の生活環境改善により工場の作業効率向上を図ること、資本家に対して高まっていた労働者の不満を緩和することなど、経済的・政治的思惑は含まれていた。しかし、彼がそこから更に一歩進んで、より遠大で綿密な新しいコミュニティーの建設を計画したことに注目すべきだろう。整然とした街並みや環境保護、労働者へのきめ細やかな配慮は、盤石な経済基盤があればこそ実践できたものだったが、それは同時にヴィクトリア朝社会の代表的倫理観とも呼べる慈善の精神や'paternalism'（父親的な温情主義）と先端の産業技術の合体を具現化したものでもあった。[48] つまり岩倉使節団は、ソルテヤで単なる産業施設や工場併設の学校を見学したというより、学校や病院などの諸施設を備えた工場を核とするコミュニティーを視察し、産業資本家主導の新しいタウン・プランニングのあり方を示されたとも言えるだろう。

ソルテヤ訪問の翌日に岩倉使節団はハリファックスで孤児院を視察したが、これはクロスリー一族が一八六四年ハリファックスに建てた全寮制の学校で、地元だけでなくイギリス各地の孤児たち二百五十名ほどが学んでいた。この学校は重厚な建物、厳格な規律などでも有名だったが、ソルトらの寄付も受けて運営されていたという。[49]

岩倉使節団の訪れた学校群の、もう一つ注目すべき訓練船の視察について、簡単に触れておこう。使節団はリヴァプールで四艘、タイン川河口で一艘の「船学校」を見学した。リヴァプールの四艘は、ジェントルマンの子弟を対象とした海軍の訓練船コンウェイ（Conway）、経済的に貧しい家庭の子弟または孤児を対象にした水夫訓練船インデファティガブル（Indefatigable）、そして非行少年の矯正施設の訓練船アクバー（Akbar）とクラレン

図 1　三艘の訓練船



RIMMER, Joan, *Yesterday's Naughty Children,* (Manchester: Neil Richardson, 1986), p.31.
左から右へ、海軍将官訓練船 HMS Conway、非行少年の更生訓練船 Akbar、経済的に貧しい家庭の孤児たちを収容していた Indefatigable。

ス（Clarence）であった。四艘の内訳および役割の違いについて、久米も木戸もそれぞれ詳細に書き記しており、矯正用の訓練船が二艘あるのはプロテスタント系とカトリック系の少年たちを分けて収容しているためだということにまで触れている。[50] 使節団が見学したタイン川河口「船学校」はウェルズリー（Wellesley）であった。一八七二年当時、イギリスには非行少年少女の矯正施設が五十五校あったが、使節団が視察した三艘の訓練船は刑の比較的軽い少年犯罪者たちを収容し、船上での訓練を通して非行少年たちの性根を入れ替え、彼らを再び普通の「少年」に戻すことを目的としていたという。[51] 訓練船での規律が厳し過ぎる、或いは教育水準の質が低いなどの批判はあったものの、少年犯罪の低下に寄与しているとして、これらの訓練船はヴィクトリア朝時代に総じて高い評価を受けていた。[52]『実記』の文面から、タイン川河口での訓練船の視察は比較的短かったのではないかと推察されるが、岩倉使節団は非行少年の

訓練船の主だった三艘を見ることにより、少年犯罪対策の一つの選択肢を示されたことがうかがわれよう。

二　教育機関選択の背景と岩倉使節団の評価

岩倉使節団本隊がイギリスで視察した教育機関の注目すべき特徴とヴィクトリア朝社会における位置づけを検討してきたが、使節たちはそれらをどのように評価したのだろうか。また、このような特徴ある教育機関が選ばれた背景には何があったのだろうか。岩倉使節団の見たもののどこまでが彼らの見ようとしたもので、どこまでがイギリス側の選択によるものだったのかという点について、確たる「証拠」となる文書が充分ないまま議論しても推測の域を出ないことは承知しているが、更なる「証拠」探しを今後の課題としつつ、使節たちの評価や近代日本の教育政策と絡め、選択がなされた背景を検討してみたい。

岩倉使節団の日本側関係者が教育機関の視察についてどこまで踏み込んだプランを立てていたと考えられるだろうか。使節団にとって、教育の視察が旅程全体において重要項目の一つであったことは既に述べたとおりである。しかし、少弁務使[53]の森有礼が自身の培ってきた人脈も駆使して積極的に日程作成に関わったアメリカ合衆国の場合とは異なり、イギリスに寺島宗則が駐英大弁務使として着任したのは岩倉使節団到着の直前であった。寺島にも幕末に二度渡英する機会はあったが[54]、どちらも長期にわたるものとは言えず、岩倉使節団の日程編成に積極的に関わるには着任から日が浅すぎたと考えるべきだろう。

しかし岩倉使節団の一行は、迎接するイギリス側に全てを任せる受け身の状態だったのだろうか。使節団本隊の中でも教育の重要性を常に意識していた木戸孝允[55]は、学校も含めたイギリス社会のあり方を視察することにかなり積極的だった。彼は時に本隊とは別行動をとり、本隊の視察日程に組まれていなかった学校や貧民窟などを

訪れ、その際に自らの希望も出していたようである。『木戸日記』によれば、彼は七月二十六日（陽暦八月二十九日）にポーツマスで「軍艦の水夫学校」、九月十六日（陽暦十月十八日）にエディンバラ市内のマーチャント・カンパニー・スクールという女子校、十月三十日（陽暦十一月三十日）ブライトンの学校、十一月七日（陽暦十二月七日）グリニッチ天文台見学後に「孤児又は水夫等の少幼を教導する学校」も視察した。[56] 木戸は寺島宗則や、田中不二麿、長與専斎らと教育について論じ合う一方、[57] 大久保や通訳の畠山義成と共に、アレクサンダー氏の案内でロンドン市内の貧民窟・阿片窟をも訪れ、ヴィクトリア朝社会の表裏両面をできるだけ幅広く探索しようと試みた。[58] しかし、日本側の公的な記録や『木戸日記』、『久米博士九十年回顧録』などの個人的な記録を繙いても、岩倉使節団本隊の日程について、日本側が視察する教育機関を積極的に選んでいた形跡は見当たらない。また、本稿で既に検討してきたように、ユニークであると同時にイギリスの事情によほど精通していない限り外国人の目にはとまりにくい学校が選ばれていることを考え合わせると、やはり迎接したイギリス側の意向が学校の選定に反映されていたと考えるのが自然であろう。

岩倉使節団のイギリス滞在日程全般を取り仕切ったのは、当時一時帰国中であったパークス駐日公使（一八二八―一八八五）とイギリス側の窓口を務めたアレクサンダー氏で、[59] 通訳官のアストン（一八四一―一九一一）がこれを補佐し、この三名が岩倉使節団本隊に同道した。『久米博士九十年回顧録』の中でも、パークスの斡旋によって岩倉使節団のイギリス内地旅行が実現し、それが日英双方にとって有益であったと記されている。[60] それでは、パークスやアレクサンダー、アストンらを始めとするイギリス側が教育機関を選定した際、どのような要素が働いていたと考えられるだろうか。

まず、しばしば指摘されるのがパークスたちの経歴である。パークスは、いわゆる叩き上げの外交官だった。両親を幼い頃になくし、親類に引き取られてグラマー・スクールを卒業した後に外交官となった彼は、中国・日

本などで実績を上げていたが、本国では高い身分も強力な縁故もない存在だった。[61] 通訳のアストンも名門校へのつてなどは持ち合わせていなかった。これらの要素は、岩倉使節団の視察した教育機関の特徴として前節で指摘した第一点目、すなわち高等教育機関やいわゆる名門校の視察が極めて少なかった点と深く結びついている。しかし、それは岩倉たちの日程に高等教育機関やいわゆる名門校がほとんど含まれなかったことの説明にはなり得ても、何故パブリックスクールの中でもクライスツ・ホスピタルが選ばれたのか、また何故スコットランドの大学が高等教育機関の視察先として選ばれたのかを説明するには不充分であろう。「何故選ばなかったのか」という消極的な理由と同時に、「何故選んだのか」という積極的な理由を検討することも私たちには必要なのではなかろうか。

前述したように、クライスツ・ホスピタル校は、民に高等教育機会を与えるというパブリックスクール本来の建学の理念を守り続け寄付金制度で維持された学校であり、しかもロンドン市との絆が極めて強かった。この建学の理念と同時に、私学でありながら地方自治体との連携を保つ教育機関としてのあり方は、エリート志向を強めていた当時の名門パブリックスクールよりも、日本の近代化政策の参考になるという判断があったことは充分考えられよう。ロンドン市長自ら案内していることからも、ロンドン市側の働きかけがあったこともうかがわれる。高等教育機関についても、歴史と伝統はあるものの、非ヨーロッパ諸国に対して当時必ずしも友好的とは言えなかったオックスフォードやケンブリッジ大学よりも、人的交流を通して親日的な空気の強いスコットランド[62]の名門大学を視察した方が、今後の日本に資するところが大きいとの考えがここでも働いた可能性が高いのではなかろうか。[63]

それでは、民衆の教育現場の選定についてはどうだろうか。何故、一般的な小学校などよりも工場併設の学校や非行少年の矯正施設などが選ばれたのか。前節で詳しく述べたように、十九世紀のイギリスにおいて、初等教

育などの整備は遅く、国民皆学の精神もまだ定着してはいなかった。これに対して、アメリカ合衆国では初等中等教育の整備が着々と進められており、岩倉使節団は長期にわたる滞在中、各地の学校をつぶさに視察する機会を与えられていた。[64] アメリカ滞在中、かなり系統だったプログラムに沿って各地の小中学校を視察していた岩倉使節団の目が肥えていたことは、当然パークスたちも把握していただろう。このようにイギリス側にとって不利な状況を打開する方策として、パークスが注目したのが、産業資本家の経営する工場併設の学校やソルテヤのようなモデル村だったのではなかろうか。良心的な産業資本家の教育や街づくりに対する関わり方を示すことは、工場見学と教育視察を兼ねられる点で日程的にも一石二鳥であるばかりでなく、明治日本の殖産興業推進や都市計画立案にとって一つのモデルを提示できると考えてのことだったとも言えるだろう。そしてこれらの経験が中長期的に日英の通商に役立つともパークスは考えていた。[65] また、犯罪者を単に法的に裁き投獄するのではなく、船上での訓練を通して矯正するというプログラムも、少年犯罪に対して、法整備以外の選択肢を提示することになると考えていたようである。当時、岩倉使節団本隊から離れて司法制度の視察を行なっていた佐々木高行の一行に対して、刑罰の制度のみならず様々な種類の矯正施設を視察させるよう、パークスが部下に命じていたことがそれを裏づけている。[66]

しかし、肝心の岩倉使節団はこれらの教育施設をどのように評価し、どこまでパークスの意図を汲み取ったのだろうか。クライスツ・ホスピタルの視察について、木戸孝允が好意的な評価を下したのに対し『実記』が何も触れていないことは既に述べたとおりである。マンチェスターの「オウン」学校で一行は化学の講義を聴講し実験室にも赴いたが、「記スヘキコトナシ」（二、一八三頁）と内容に関する『実記』の評価はいささかそっけなく、『木戸日記』にもわずかに「又学校り（ヾ）」（第二巻、二四九頁）と書かれているのみだった。エディンバラ大学についても使節たちの残した記録は比較的淡白なものであった。

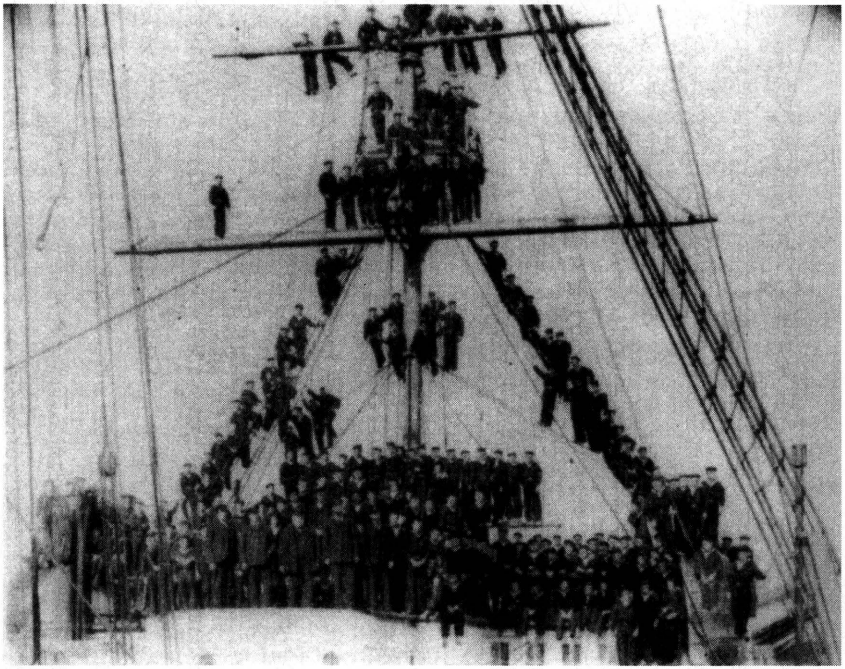
工場に併設された学校について、使節たちが労働条件と絡めた視点で観察したことは第一章第一節で述べたとおりである。しかしマンチェスターでは久米が、逆にバーミンガムでは木戸が学校について言及していないなど、使節たちの記録にはばらつきがあった。殊に久米の場合、工場視察の際は製造工程を詳述するため、そのほかの要素に充分な紙幅を割く余裕がなかったということもあるだろう。それでもバーミンガムで訪れたガラス工場併設の学校については「男女子千余人ヲイレ、小学普通ノ学ヲ授ク、幼ナルハ五六歳ノ嬰孩ニ及フ、男女室ヲ異ニス、此日マツ校ニ入リテ、寮房ヲ歴回スルニ、童男女皆祝声ヲナシテ送ル」（『実記』㈠、三三六頁）と記している。ガラス工場の労働者数が二千五百人ほどだったことと考え合わせると、一行が訪れた学校は寮も設けられたかなり大規模なものだったと言えよう。

ソルテヤとハリファックスで岩倉使節団は授業も参観したが、ハリファックスでは生徒たちが校庭で唱歌を歌いながら運動する様子などを見学した。[67] 殊に印象に残ったソルテヤの学校について、久米は次のように記した。

「邑中ニ小学校ヲ建ツ、村民ノ子弟男女ヲシテ、半日ハ場ニ出テ、業ヲ操リ、半日ハ校ニ入リテ教ヲ受ケシム、学知（タフリック）ト実験（プラチカル）ト、互ニ相進メル良法ニテ且製作場ヨリ給料ヲ受ルハ、其子弟ニ利アルノミナラス、製造ニモ亦利アリ、英国人ハ、職工ヲ保護シ、貧民救護ニ力ヲ尽スヲ、栄誉ノ一トナス、此場主ノ用意モ、亦感賞スヘシ、校中ニテ教ヘル科ハ、小学普通ノ科ヲ授ク、男女トモニ知ラサルヘカラサルノ芸術ニテ、高尚ノ科ニ及ハス」（㈡、二八六頁）（傍点原典）

「学知（タフリック）ト実験（プラチカル）」というのは、『実記』の中で久米が好んで用いたキーワードの一つであった。学校に続いてソルテヤ村の諸施設について述べた後、久米は「此ヲ職工市街ノ仕組トス、勧工ノ道ニ於テ、深ク意味アルコトナリ」（㈡、二八六頁）と述べたが、[68] イギリス側の伝えようとしていたメッセージを久米がしっかり受け止めていたことが文面から読み取れよう。

図2　鈴なりの少年たち



RIMMER, Joan, *Yesterday's Naughty Children,* (Manchester: Neil Richardson, 1986), p.23.
非行少年の更生訓練船 Clarence。賓客に対しては、大勢の少年たちが正装してマストに登り歓迎の意を表すのが習わしだった。

授業内容に関わる記述は、ロンドンの小学校を訪れた際にも『実記』に登場している。前述したように使節団は八月十五日（陽暦九月十七日）にロンドン市内の小学校を訪れ、カリキュラムの説明を受けた上で、女子児童を対象とした紡織の授業を見学した。数理光学などの視点を踏まえた理論が実技と並行して教えられている点に注目し、久米は「是其愈学ンテ愈深キ所ナリ」（㈡、一〇一頁）と述べている。「学知（タフリック）ト実験（プラチカル）」という言葉こそ用いられていないがそれらが実践されていると久米がここでも感じ、高く評価していたことがうかがわれる。

しかし、理念は立派でも教育内容がそれに見合っていないと判断した時の久米の評価はかなり手厳しかった。例えばリヴァプールで四艘の訓練船を視

察した際の感想は、海軍訓練船のコンウェイについては「百事ミナ用意丁寧ナリ」、それが水夫の訓練船インデファティガブルに対しては、「船中ノ接遇甚タ麁ナリ」、更に非行少年を収容していたクラレンスとアクバーになると、「第三第四ノ両船、ミナ不規則ニテ、桅上ノ昇降モ甚タ隙取レリ」(69)と徐々に辛口の評価となり、非行少年の矯正施設として訓練船が成功しているとの認識を持つには至らなかった様子がうかがわれる。当時、賓客が訪れると少年たちは正装してマストに登り、歓迎の意を表すのが通例だったにもかかわらず、それすらも充分には評価されなかったようである。制度としての面白さに着目したからこそ、久米も木戸もそれぞれ詳しい記録を残しはしたのだろうが、その実態は岩倉使節団一行を感心させるほどのレベルに達していなかったということなのだろう。『実記』の考察は、時に久米たちの理解の限界を示唆する場合もあるものの、その大半において、彼らの眼力の鋭さを感じさせるものだったと言えるのではなかろうか。

三　むすびにかえて——まとめと今後の課題

本論文では、岩倉使節団がイギリス滞在中に視察した教育機関を検討し、日本側が見たもの・見ようとしたもの・見落としたもの、そしてイギリス側が見せようとしたものなどの考察を試みた。ここでその全体像をもう一度整理しておこう。

視察先の選定はパークスたちイギリス側のイニシアチヴによる所が大きく、イギリスの教育事情と相俟って、一般的な学校よりも工場、タウン・プランニング、犯罪対策などと結びつく特徴ある教育機関が選ばれたと考えられる。既に検討してきたとおり、それらが明治日本の近代化に役立ちそうだとの判断、そして日本の近代化がイギリスの通商に資するとの判断がそこに働いていたことも忘れてはなるまい。それに対する岩倉使節団の評価

には、彼らの理解が及ばなかった部分と、かなり冷徹に視察先の教育内容を吟味していた部分の両方が混在していた。岩倉使節団が教育機関の環境や教育内容を冷静に見極めようとしていたことも本稿で明らかにできたと思う。

しかし、岩倉使節団のイギリスでの教育視察の成果が日本の教育政策に直接反映されることは少なく、イギリス型の工場併設の学校やモデル村、非行少年の矯正訓練船などが日本の教育制度の中に組み込まれるには至らなかった。そこにはイギリス側が見せようとしたものと日本側が見ようとしたものを隔てる二つの要素が作用したと考えられる。

第一に、イギリス内部の問題――つまり理念と実態の乖離――を日本側が見抜いた場合が少なくなかったこと。産業資本家の理念がいくら立派でも、学校の教育内容が実態を伴っていたかどうかは別問題であり、その見極めを使節たちは行ない、今一つと判断した場合にはそれ相応の評価を下すにとどまった。一八七〇年代のイギリスは教育の概念が大きな転換点を迎え、工場併設の学校に対する評価もいわば曲がり角にさしかかった時期でもあった。[70] パークスたちイギリス側がそれらをどこまで岩倉使節団に伝えたかどうかは疑問であるし、産業資本家の介入する教育システムの限界を岩倉使節団が見極めていたとまで言い切れるかどうかも慎重に判断すべきだが、少なくとも実際の見聞を通して使節たちが冷静な査定を行なっていたことは間違いない。第二に、日本側の主眼が制度の整備に置かれており、イギリス側が岩倉使節団に見せようとしたものの中に政策構想の整備に結びつくものを特に見出せなかったこと。教育政策の整備の遅れを逆手に取ってパークスは産業資本家の裁量が効果的に発揮された例を提供し、それらの中にはソルテヤ村のように、使節たちに強い好印象を与えたものもあった。しかし、日本では岩倉使節団の帰国を待つまでもなく、国家主導の教育制度の整備という路線が既に走り出していた。それを補強する主な情報源として機能していたのは、田中不二麿らの岩倉使節団別動隊が行なっていた制度

面の調査だったのである。[71] この規定方針に割って入ってまで積極的に日本に導入しようというほどのものを岩倉使節団本隊は見出さなかったのであろう。産業技術の向上と結びつき得る視察先が選ばれていたにもかかわらず、このような評価しか得られなかったのはパークスにとって残念なことだったに相違ない。ソルテヤ村などのモデル村構想に、都市計画だけでなく、労働者の不満の高まりを「緩和」する側面も含まれていたことを考え合わせると、これらの視察は日本の中長期的な産業政策・労働政策を検討する上で意味深いものだった筈である。しかしそこにまで岩倉使節団の目が至らなかったのは、日本側にとっても残念なことだった。労働者に対する視点は、『実記』全編を通し、工場経営や産業効率などに重心を置いたものにとどまっていた。明治初期の視点として致し方ないことだったとはいえ、これこそが岩倉使節団の「見落としていた」ものだったとも言えるだろう。

本論文のテーマに関しては、確定的な資料の特定も含め、まだ精査すべき点が数多く残されている。また、ヴィクトリア朝社会構造・産業力を支える諸要素に対する岩倉使節団の理解という大きなコンテクストの中での位置づけを行う必要がある。その中にはイギリスの発展の源として久米が捉えた「国民性」（例えば「英国ノ富強ヲ世界ニ鳴スハ、其民ノ性、自強力ニ逞シク、篤ク法ヲ守リテ、勉励スルニヨル」(二)、二四四頁、（傍点原典）のような評価）と教育の結びつき、ヴィクトリア朝社会における階級に対する理解、そして貧困と労働に対する解釈なども含まれる。[72] 更に岩倉使節団別動隊の田中不二麿たちの教育視察、幕末や明治初期の他の日本人が見たヴィクトリア朝社会も視野に入れて教育・労働・福祉・階級の諸側面で議論を深める必要もある。本稿ではまだ史料収集過程の経過報告に近い段階の箇所も少なくないが、議論を更に充実させることを今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆に際しては、ケンブリッジ大学図書館所蔵ジャーディン・マセソン文書を閲覧した。同文書の閲覧を

許可して下さったジャーディン・マセソン社、論文作成にあたって温かいご配慮とご助言を賜ったケンブリッジ大学図書館のジョン・ウェルズ氏並びに小山騰氏、ブラッドフォード中央図書館のJ・クラーク氏に、この場を借りて御礼申し上げたい。

（1）岩倉使節団の留守中に明治政府は太陽暦を採用したが、本論文が主として対象とする明治五年（一八七二年）はまだ旧暦であった。本論文は、明治六年一月一日（一八七三年一月一日）までの記録は原則的に旧暦で年月日を記載し、必要に応じ（　）に太陽暦を付記する形式を採る。一行のイギリス滞在が明治五年七月十三日（一八七二年八月十六日）から同年十一月十六日（一八七二年十二月十六日）と同一年内であるため、年の記載が略されている場合は、明治五年（一八七二年）を指すものとする。

（2）『米欧回覧実記』は、権少外史として岩倉具視特命全権大使に随行した久米邦武が中心となって編纂した岩倉使節団の記録である。本論文では、『実記』が岩倉使節団の公式記録だったという立場をとる。『実記』は、田中彰校注の岩波文庫版（全五巻）に依拠した。尚、『実記』では、章が「巻」と記されており、それが更に五つの「編」にまとめられている。本論文では混同を避けるため、岩波文庫版の「巻」は、例えば㈤のように( )に入れる表記に統一した。

（3）明治五年十月二十二日（陽暦十一月二十二日）に第一回会談、同十月二十七日（陽暦十一月二十七日）に第二回会談、同十一月六日（陽暦十二月六日）に第三回会談が行なわれたが、双方の意見が対立したまま会談は打ち切りとなった。

（4）明治五年十一月五日（陽暦十二月五日）にウィンザー城でようやく女王謁見が実現したが、イギリス側主催の午餐会には女王も外相も出席しなかった。

（5）妻木忠太編『木戸孝允日記』第二巻、東京：日本史籍協会叢書、一九三三年。（以下、『木戸日記』第二巻と略記。）尚、『実記』の表記に合わせ、『木戸日記』の表記の一部を適宜、旧漢字から現代漢字に改めた。

（6）当時の新聞報道については、British Library の Newspaper Library における調査がまだ途上にあるため、新聞報

道を網羅的に取り上げている以下の文献のデータも参照した。森川輝紀「英国の新聞報道にみる岩倉使節団」（『埼玉大学紀要』、第二十八巻、一九七九年）、ANTHONY, D.W. and HEALEY, G.H., *The Itinerary of the Iwakura Embassy in Britain*, (Sheffield: University of Sheffield, 1996).

（7）アメリカ滞在が長引いたこともあり、より効率的な視察が行なわれるようになった。木戸孝允や伊藤博文、大久保利通ら副使たちも時に別行動をとることがあった。このため、岩倉使節団本隊は、横浜を出港した当初に比べ、規模が縮小していた。田中不二麿は帰国後、欧米各国の教育制度の調査報告をまとめ、明治十年（一八七七年）に『理事功程』を提出している。

（8）『実記』には「総生徒百五十余人アリ、大抵七八歳ヨリ十三四歳マテ」（㈡、一〇〇頁）とあるが、木戸孝允は「生徒二百人余九歳より十五歳迄」（『木戸日記』第二巻、二三〇頁）と記している。使節団が参観した授業（本稿第二章で後述）の内容からこの学校も工場に併設されていた学校の類であった可能性があるが、更なる調査が必要である。

（9）イギリスの大学のトップにオクスフォード、二番目にケンブリッジを挙げた久米は、「都会ノ地ハ、人ノ耳目ノ感、自然ニ散漫シテ、奢靡邪淫ニ流レ易ケレハ、学齢ノ青年ハ、多ク其習慣ヲ誤ル、故ニ英米ノ学校ハ、小学ノ外ハ、多ク村邑ニアリ」『実記』㈡、一〇一頁。（傍点原典、以下同様。）当時イギリスで高等教育を受ける機会に恵まれたのは主として中流階級以上（厳密にはアッパーミドルクラス以上）の子弟であり、彼らの多くは全寮制のパブリックスクールからオクスフォードやケンブリッジ大学に進学した。学校の多くは都市部から離れた田園地帯にあり、そこで生徒たちは親元を離れ、「知徳育」をバランス良く学ぶことを通しジェントルマンとなることを目指した。彼らは禁欲的とも言えるほど質素で規律の厳しい寄宿舎生活を送り、クリケット、ボート、ラグビーなどの団体競技を通して組織への奉仕とフェアプレーの精神を叩き込まれた。その点で、少なくともイギリスに関しては久米の解釈は的を射ていたとも言えよう。

（10）『木戸日記』第二巻、明治五年八月九日付、二三〇頁。

（11）*The Times* の記事には「日本の使節主要メンバー六人または八人がサー・ハリー・パークスとアレクサンダー氏に伴われ」（一八七二年九月十二日付）と書かれていること、王厩（Royal Mews）が岩倉らの宿泊先から程近かったことを考え合わせると、岩倉がこの日のシティ視察を副使たちに任せた可能性はあるが確証はない。この日は市長公

邸で午餐会が催されたが、『略日記』には「晩食ノ亨アリ」（『実記』㈡、三九二頁の九五頁に対する註参照）と記されているという。

(12) クライスツ・ホスピタル校については、ALLEN, George, / revised by MORPUNGO, J.E., *Christ's Hospital,* (London: Town & County, 1984) などが詳しい。二十世紀初頭に学校はイングランド南東部サリー州に移転したが、慈善の精神は現代にも受け継がれ、教育水準も高く評価されている。チャールズ・ラム、S・T・コールリッジ、エドマンド・ブランデンなどをはじめ著名な卒業生も輩出している。

(13) このイギリス国内旅行に参加したのは当初九人、途中からの合流者が多少いたものの、十五名に満たない集団であった。『実記』㈡、一一六頁及び㈢、三九四頁の註参照。

(14) 『実記』㈡、一四二―一四三頁。『木戸日記』第二巻、明治五年八月三十日付、二四二―二四三頁。

(15) 『実記』㈡、一七一―一八〇頁。

(16) 『木戸日記』第二巻、明治五年九月五日付、二四八頁。この日、午前九時に禁酒協会のメンバー二十名が使節団の宿泊していたホテルを訪れスピーチしたとの記録もある。

(17) 『実記』㈡、一八三頁。筆者は 'The Japanese Encounters with Victorian Britain'（慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』、第一二三号、二〇〇五年三月、七七―七八頁）の中で、一行がロバート・オウェンの教育理念のもとに設立されたソルフォードにある学校を訪ねた可能性を挙げたが、これは慎重に再検討する必要があると考えている。もし Owens College を訪れたのであれば一行は理系教育に重点を置いた高等教育機関を視察したことになり、ロバート・オウェンの系列校を訪れたのなら、ユートピア社会主義者として知られるオウェンの先進的な教育理念の一端を垣間見たことになる。岩倉一行のマンチェスター滞在に関する現地の新聞報道で、筆者が唯一閲覧できたのは *Manchester Times* だが、一八七二年十月十二日付の記事に、一行の学校訪問に関する記載は見当たらなかった。しかし同日付の 'The Owens College' という記事の内容は、『実記』に登場する「オウン」学校と合致する点が多い。

(18) 岩倉具視とその随行がハイランド地方を巡る間、体調のすぐれない木戸孝允はエディンバラに残ったが、九月十六日（陽歴十月十八日）に市内のマーチャント・カンパニー・スクールという女子校を訪れている。（『木戸日記』第二巻、明治五年九月十六日付、二五八頁）。伊藤博文もグラスゴーへ戻り別行動をとっている。

(19) 前述した「オウン」学校が仮にOwens Collegeであったとしても、当時はまだ大学にはなっていなかった。(一八八〇年に大学として発足。)

(20) 『実記』(二)、二〇九—二一一頁。『木戸日記』第二巻、明治五年九月十二日付、二五四頁。

(21) 『実記』(二)、二八一頁。岩倉たちがタイン川に沿ってニューカースルやタインマウスなどを精力的に視察していた明治五年九月二十一日(陽暦十月二十三日)、木戸は病気療養のため本隊に同行しなかった。

(22) 『実記』(二)、二八六頁、二九四—二九五頁。

(23) 『実記』(二)、三三六頁。木戸孝允も同行したが、学校についての言及はない。

(24) 『実記』(二)、三七四頁。『実記』には「大裁判所、并ニ病院ヲ回覧ス」とあるのみだが、同日付『木戸日記』(第二巻、二八〇頁)には、一行が市内の病院を訪れ、看護学校を視察した記録が残されている。久米も木戸も病院名を記しておらず(『木戸日記』には「此病院英国第一等也」とある)、現地新聞報道がないため、これ以上の詳細は不明である。

(25) これは一八七二年五月一日から十月十九日にかけてロンドンのケンジントンで開催された国際博覧会(Second Annual International Exhibition)で、岩倉たちは八月四日にもここを訪れている。一八五一年のロンドン万国博覧会開催以降、十九世紀後半は「博覧会の時代」と呼ばれるほど世界各地で万国博覧会や勧業博覧会などが盛んに催された。一八七一年より毎年ロンドンで国際博覧会の開催が計画されたが次第に赤字がかさみ、毎年開催は一八七四年が最後となった。

(26) 『実記』には「夫ヨリ学校ニ至ル」とあり、そこで地理学の講義が行なわれたと記されているが、『木戸日記』第二巻、明治五年七月十七日付(二一六頁)の記述や当時の新聞資料を総合すると、これは博物館の一角で催された地理部会の報告を聴講したと考えるのが妥当であろう。

(27) 十月二十六日(陽暦十一月二十六日)から十月二十九日(陽暦十一月二十九日)まで現地新聞報道に岩倉使節団が登場しないため、これ以上の詳細は現段階では不明である。おそらく公式訪問ではなかったのであろう。岩倉使節団のイギリス滞在が長期化していたこともあり、ロンドン帰着後の使節たちに関する新聞報道は目に見えて減っていた。

(28) 尤も、使節たちの一部は折にふれて芝居見物なども楽しんでいた。（紙幅の関係などから、岩倉使節たちの「お楽しみ」編については、本稿では省略する。）

(29) イギリスにおいて、労働者階級（working class）・中産階級（middle class）・上流階級（upper class）などの階級差が明確に意識されるようになったのは、十九世紀に入ってからと一般的に解釈されている。本稿での「民衆」とは、主として労働者階級を指す。当時のイギリスの上流階級やアッパー・ミドル・クラスは、住み込みの家庭教師を雇って自宅で子供を教育した後、高等教育機関に送り込むことが多かったが、ミドル・ミドル・クラスあるいはロウアー・ミドル・クラスの家庭にはそのような経済的余裕はなかった。尚、ヴィクトリア朝階級社会と岩倉使節団については稿を改めて論じたい。

(30) 十八世紀末以降は、日曜学校（Sunday School）の数も増え、民衆教育の場として貢献するようになった。

(31) 非国教会系学校の教育理念は、古典文法を重視する国教会系に比べ、国語教育・自然科学教育が重視されていたとされる。だが労働者階級の児童に対する教育は、国教会・非国教会どちらの系列でも、キリスト教道徳を通して目上の者への尊敬や国家秩序への恭順を学び、3R's と呼ばれる読み書き計算の基礎学力を備えることに主眼が置かれていた。

(32) Voluntary schools, voluntarism, endowed schools などの理解も同様だったと考えられる。

(33) 一八三三年の工場法により、九歳未満の児童は紡織工場で労働することが禁じられ、九歳から十一歳（二年半後には九歳から十三歳に引き上げられた）の児童は一日八時間以上ないしは週四十八時間以上働くことを禁じられるとともに一日最低二時間は学校に出席することが義務づけられた。SANDERSON, M., *Education, Economic Change and Society in England 1780–1870*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), p.17 他参照。

(34) 尤も、その一方で一八三三年には国庫補助金制度が発足し、国民協会と内外学校協会の慈善教育に対し、それぞれ二万ポンドの国庫助成を実施、年々増額された。このようにして、教育への国家介入は学校運営面でも次第に拡充して行った。

(35) 貧民救済は救貧院（workhouse）においてのみ行なわれると制定されたが、その惨めな状態は、救貧院が弱者救済を念頭に営まれる機関でないことを如実に示していた。ヴィクトリア朝の大都市における下層労働者の生活は実に

悲惨なものであったが、失業（Unemployment）という概念が定着したのは十九世紀末近くで、それまでは失業者はもちろん、技術を持たぬゆえ非熟練労働者（unskilled workers）が惨めな生活を強いられているのもある程度致し方ないという考え方が根底にあった。そこから脱したければ、技術を身につけ、自助努力すべきである、という自助（Self Help）の理念が支配的だった。

(36) 十九世紀イギリスの労働者階級の児童が置かれていた過酷な生活環境に関しては、膨大な量の社会経済史研究書がある。また岩倉使節団の訪英より前の年代になるが、エンゲルス、メイヒューのルポルタージュやディッケンズの小説などを通し十九世紀前半から半ばにかけてのヴィクトリア朝社会の裏側を垣間見ることもできる。教育行政制度整備の歴史については、大田直子『イギリス教育行政制度成立史』（東京：東京大学出版会、一九九二年）が詳しい。

(37) また、一八六七年の第二次選挙法改正以降、政財界が民衆教育の政治的意義に注目するようになったことも看過できない。SIMON, B., *The Two Nations and the Educational Structure 1780～1870*, (London: Lawrence & Wishart, 1976), pp.354-360 など参照。

(38) 一八五六年に設置された教育局（State Department of Education）は、一八三九年に発足した 枢密院教育委員会（視学官による考査制度を設け、民衆教育の国家管理による質的向上を目指した）の発展したものである。

(39) しかも、イギリスで義務教育の年齢が十二歳までと定められたのは一八九九年の教育法、更に五歳から十三歳までの義務教育年限が設けられたのは一九〇二年、つまり二十世紀に入ってからのことだった。一九〇二年の教育法（通称バルフォア法）で中等教育も義務教育年限に含まれるようになったことと連動し、初等・中等教育を管轄する地方教育当局（Local Education Authority）が新たに発足し、公立中学校も設立された。しかし在学率は一〇％程度と極めて低く、まだかなり不完全な状態だった。

(40) スコットランド以外の地域では、「初等教育（'primary education'）」という言葉自体が一般的に用いられるようになったのは二十世紀初頭で、それ以前は、初等教育は労働者階級の児童の教育を、中等教育は中流階級の教育を指し、お互い区別されていた。（COOK, Chris and KEITH, Brendan, *British Historical Facts 1830-1900*, (London: Macmillan, 1975), p.191.）ヴィクトリア朝倫理観のキーワードの一つに挙げられる Self Help の理念は、十九世紀後半にようやく整い始めた公立の学校教育においても、3R's と共に、基本の柱となった。教育の担い手の主流は私立

だったのに対し、後発の公立校の多くが主として労働者階級の児童にも平等に教育を授けるために設置されたものだったため、ここに、「私立はエリートのため／公立は労働者階級のため」という暗黙の内の階級的線引き・ランクづけが行なわれるようになり、これが二十世紀以降も尾を引くことになった。

また、中産階級における国教会と非国教会の対立と同時に、中産階級の教育家と労働者階級の急進主義者の対立という二つの要素が、イギリスの教育政策とシステムの形成を遅らせたとされている。（CHECKLAND, S., *British Public Policy 1776–1939*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), pp.99–102, pp.141–142.）

(41) ソルテヤ（Saltaire）という村の名前は、創始者のソルト（Sir Titus Salt' 1803–1876）に因んでつけられたものである。ソルテヤは二〇〇一年にユネスコの世界遺産登録を受けている。エア川（River Aire）をはさみ、ヨークシャー（現在のウェスト・ヨークシャー）の丘陵地帯に広がる村落だが、当時は物資の輸送に重要な役割を果たしていたリヴァプールとリーズ間の運河と鉄道の両方が利用できる利便性も備えていた。

筆者は二〇〇八年九月に実地調査のためソルテヤ、ブラッドフォード、ハリファックスなどを訪れた。ソルテヤ、ハリファックスは共にブラッドフォードから電車で十五分弱の所に位置しているが、起伏に富んだ丘陵地帯の懐に抱かれるように工場と整然とした街並みが忽然と姿を現したのは大変印象的だった。殊にソルテヤは駅舎のほぼ正面に石造りの工場がどっしりと構え、坂の上に住宅と村の施設が整然と立ち並び、村を囲むように丘陵地帯が連なっており、迫力さえ感じられる風景が広がっていた。十九世紀後半のブラッドフォードが現在よりはるかに活況を呈しており、同時に環境汚染も深刻だったことを考えると、岩倉使節団の目にしたソルテヤ村の特徴はもっと際立っていた筈である。

(42) 一八五一年のブラッドフォードの人口は一〇三、七七八人、一二九もの紡織工場がひしめいており、大気汚染はもとより河川や下水道の汚染が住民の生命を脅かし、コレラなどの疫病も頻発、乳幼児死亡率がイギリスで五番目に高かったという。ブラッドフォード、及びソルテヤの歴史については、DUCKETT, Bob and WADDINGTON-FEATHER, John, *Bradford*, (Stroud: Tempus, 2005); FIRTH, Gary, *Bradford*, (Stroud: Tempus, 1995); FIRTH, Gary, *Saltaire*, (Stroud: Tempus, 2001); *Saltaire History Exhibition*, (Leeds: A Barleybrook publication, 2008) などを始め、多数の書籍がある。都市計画という観点では、BRIGGS, Asa, *Victorian Cities*, (London: Odhams Press, 1968) も参照。

(43) 工場移転から十四年後の一八六八年、八百戸以上の住宅から成る住宅群の整備が完成した。ソルトは工場労働者を順次ソルテヤ村に移り住まわせたが、ブラッドフォードから通勤する労働者のために、時間帯を決め労働者の移送専用列車を走らせた。現在、ブラッドフォードとソルテヤは電車で一〇～一五分ほどで行き来できる。

(44) BRADLEY, Ian, *Enlightened Entrepreneurs*, (Oxford: Lion Hudson, 1987), pp.35-49など。酒類の販売すら一八六七年まで禁止されていた。村の美観維持と労働者の清潔な生活を考慮したソルトは、住民が洗濯物を街路に外に干さずに済むよう、公衆浴場と共同の洗濯場を一八六三年に建設するほどの徹底ぶりであった。そこには蒸気で動く洗濯機や二十四個の個人用浴槽が設置されていたという。残念ながら浴場は不評で、一八九四年に住宅に建て替えられてしまった。また、大気汚染対策として、工場の煙突にフィルターを設置するなど、ソルトの生活環境に対する意識は極めて細やかであった。

(45) 規定時間の半分だけ授業を受け、残りは工場労働に従事する half-timers と呼ばれる児童が多かったという。*Saltaire History Exhibition*, (Leeds: A Barleybrook publication, 2008). この点を木戸は日記の中で正確に記している。また岩倉使節団が訪問した当日、タイタス・ソルトは不在で子息たちが接遇に当たったようだが、木戸は「ソールトは人となり寛容にして仁恵あり製造家中には実に稀なるものと云」との風評を記した。(『木戸日記』第二巻、明治五年九月二十三日付、二六三―二六四頁。)

(46) 言うまでもないことだが、モデル村の先駆的存在としてグラスゴー郊外のニューラナーク村を建設したロバート・オウェン（一七七一―一八五八）を忘れてはならない。モデル村の建設は、モデル・ヴィレッジ・ムーヴメントとも呼ばれイギリス各地で篤志家の関心を集め、後にナショナル・トラストを創設したオクタヴィア・ヒルもこの活動に積極的に関わった。しかし、理想主義的な立場からモデル村の推進を提唱した人々と同時に、経営者としての政治的経済的思惑から工場村の建設に取り組んだ産業資本家も多かった。(後者については、例えば以下を参照。REYNOLDS, Jack, *The Great Paternalist*, London: Maurice Temple Smith, 1983, pp.256-265.)

(47) アクロイドはハリファックスで梳毛工場を、クロスリーも同地で絨毯製造工場を経営していた。モデル村アクロイドン（Ackroydon）の建設は一八四八年に始まり、一三六戸に七〇〇名ほどの住民が生活したが、初期の住宅は家賃が高すぎ、中期以降に建てられた住宅は安普請で住民の健康に対する配慮が欠けていた。クロスリーはハリファッ

クスのウェスト・ヒル・パークにモデル村を建設し、一八七一年には二百余の住戸ができていたというが、共有設備の全ての完成には至らなかった。これらには資金源となる工場の経営悪化なども影響していた。一方、ソルテヤ村は、約一万人の収容を目指し、当初から綿密な構想が練られたという。FIRTH, Gary, *Salt & Saltaire,* (Stroud: Tempus, 2001), p.25, pp.28–32, p.41.

(48) ソルトの没後も村民はソルテヤの規模や先進性・独自性を誇りにしていた。例えば、TATTAM, Audrey May, *Saltaire Born and Bred,* (Shipley: A.M. Tattam, 1983) などの村民の回顧録参照。

(49) ハリファックス周辺の地元の児童が占める割合は約二〇％程度だったという。総工費約五、六〇〇ポンドをかけた建物の中には、校舎・寄宿舎の他に遊戯室や室内の小さなプールなども設けられていた。また、ソルトとクロスリーは縁戚関係にあった。TAYLOR, Rose, KAFEL, Andrew and SMITH, Russell, *Crossley Heath School,* (Stroud: Tempus, 2006), pp.38–62.

(50) 『実記』㈡、一四二―一四三頁。『木戸日記』第二巻、明治五年八月三十日付、二四二―二四三頁。クラレンスがカトリック系、アクバーがプロテスタント系であった。

(51) THOMAS, D.H., *Reformatory and Industrial Schools,* (Newcastle upon Tyne: Newcastle upon Tyne Polytechnic Products, c1986), p.5, p.11, p.41.

(52) HORN, P., *Children's Work and Welfare, 1780–1890,* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), pp.56–57.

(53) 森有礼（一八四七―一八八九）は、明治三年に少弁務使として渡米、明治五年四月に中弁務使、同年十月に弁務使の廃官に伴い代理公使に任命された。

(54) 寺島は、一八六二年に幕府から派遣された遣欧使節団の一員として、一八六五年には薩摩藩密航留学生の年長格の一員として渡英している。森有礼も薩摩藩密航留学生の一員として渡英し、その後さらに渡米して研鑽を積んだ。また寺島は、一八七二年に条約改正交渉の問題で一時帰国した大久保利通・伊藤博文がアメリカに戻る際に同行し、ワシントンを経て岩倉使節団より一足先にロンドンに着任した。

(55) 例えば杉山孝敏宛書簡、明治四年十二月十七日付、『木戸孝允文書』第四巻、（東京：日本史籍協会叢書、一九二九―一九三〇年）、三一九―三二〇頁などを参照。

(56) 『木戸日記』第二巻、二二〇—二二一頁、二五八頁、二八一頁、二八六—二八七頁。尚、当時子息の正二郎がブライトンに留学中だったことを考え合わせると、木戸がブライトンで訪れたのは正二郎の留学先だった可能性が高い。田中不二麿と文部官僚もこれに同行している。病気がちだった木戸は本隊より緩やかなスケジュールを組むことも少なくなかった。しかし体調が回復すると、十一月一日（陽暦十二月一日）にブライトンを一泊訪問した翌日からアイルランド小旅行を決行し、ダブリンを視察後、十一月四日（陽暦十二月四日）午前六時にロンドンへ戻り、午後にグランヴィル外相邸でグラッドストンと面会・会食、翌日ヴィクトリア女王謁見に同行するなど、驚異的な行動力を発揮した。

(57) 『木戸日記』第二巻、明治五年十月十八日付、二七六頁。この日は外出先からの帰途、寺島宗則を訪ね、学校規則などについて議論した。また明治五年十月二十五日（二七九頁）には、一足先にイギリスからドイツにわたっていた田中不二麿と長與専斎らがイギリスを再訪し、ドイツ人のお雇い外国人雇用の件などについて木戸と話し合っている。

(58) 『木戸日記』第二巻、二八九—二九〇頁。久米邦武『久米博士九十年回顧録』（東京：早稲田大学出版部、一九三四年）、下巻、四二〇—四二二頁。久米によれば木戸と大久保は、信頼のできる畠山だけを通訳に伴い、アレクサンダーの案内でお忍びの視察を行なったという。

(59) これは Major General George Gardiner Alexander（1828-1897）を指す。彼は中国専門の武官（陸軍少将）で、パークスの推挙により岩倉使節団の接伴係を拝命したという。彼が日程編成や視察先の選定にどれほど発言力を持っていたかなどの詳細などについてはなお調査が必要である。RUXTON, Ian, 'Britain [2]' in NISH, Ian ed., *The Iwakura Mission in America & Europe*, (Richmond: Curzon Press, 1998), pp. 57–58; ANTHONY, D.W. and HEALEY, G.H., *The Iitinerary of the Iwakura Embassy in Britain*, (Sheffield: University of Sheffield, 1996), p.49.

(60) 『久米博士九十年回顧録』（東京：早稲田大学出版部、一九三四年）、下巻、三〇九—三一〇頁。

(61) 日本でしばしば強権発動し高圧的な態度をとることが多かったパークスが本国外務省などで小さくなっている様子を見て、岩倉使節団一行は溜飲の下がる思いだったと久米は『九十年回顧録』などの中でたびたび記している。尚、パークスの伝記としては、DANIELS, Gordon *Sir Harry Parkes: British representative in Japan 1865–83*, (Richmond:

Japan Library, 1996) が詳しい。

(62) スコットランドは日本から理系の留学生を幕末以来受け入れているだけでなく、スコットランド出身の技術者や商人が日本で活躍していた。

(63) スコットランドの教育は現代でもイングランドやウェールズと一線を画しており、大学入試制度やカリキュラムなどの独自性を誇りとしている。（例えばイングランドやウェールズの大学が三年制なのに対し、スコットランドの大学は原則的に四年制である。）しかし岩倉使節団が、一八六〇年代より日本からの留学生を受け入れてきた University College, London を訪れなかったのは意外である。

(64) 『実記』㈠を繙くと、小学校の視察がほぼ確実に日程に組まれていたことがわかる。シカゴのようにたった一泊しただけの訪問先でも、大火災の後という事情があるにせよ一行は二校の地元小学校を訪れている。『実記』㈠、八八―八九頁。全般的に、アメリカの小学校のカリキュラムに、唱歌や国歌を定期的に歌うこと、体育や行進を通して児童の体力増強が図られていることなどが盛り込まれている点、それが児童に与える精神的・道徳的好影響が高く評価されていた。

(65) この点について、イギリス外交文書やジャーディン・マセソン文書所収のパークス文書の更なる精査が今後の課題である。パークスの抱いていた展望については、『久米博士九十年回顧録』（東京：早稲田大学出版部、一九三四年）、下巻、三〇八―三一〇頁、を参照。

(66) Jardine Matheson Archives, Parkes Papers 33/25, John Long to Parkes, 一八七二年十二月二十三日付報告書。佐々木たちは工場・農場や船など様々な種類の矯正施設に連れて行かれ、非行少女専用の矯正施設も見学したようである。

(67) 『実記』㈡、二九四―二九五頁。『木戸日記』第二巻、明治五年九月二十四日付、二六五頁。

(68) その後パリでビットショーモン公園を訪れた際にも、久米は「職工市街ノ法トハ、各都府ニ於テ、会社、若クハ製作家ヨリ、其職工ノタメニ、家屋ヲ建築シ、職工ヲシテ、賃金ノ幾分ヲ積ミテ、終ニ其家主トナラシムル目的ニ出ルモノナリ、曩ニ英国「ブラットホール」ニ於テ、「サー」ノ爵ヲ与ヘラレタル、「タイトル」氏カ、紡織場ヲ記シタルハ、其最モ周備セルモノニテ」と述べている。（『実記』㈢、八五―八六頁。）

(69) 『実記』(一)、一四二―一四三頁。久米邦武は回顧録の中でリヴァプールでの行動を振り返ったが、「此の他、造船場、船学校及び市中を見物し」とわずかに記しているに過ぎない。『久米博士九十年回顧録』(東京：早稲田大学出版部、一九三四年)、下巻、三〇八頁。

(70) STEPHENS, W.B., *Education in Britain 1750–1914*, (Basingstoke: Macmillan, 1998), p.11, pp.77–97; HOPKINS, E., *Childhood Transformed*, (Manchester: Manchester University Press, 1994), p.220. 劣悪な工場併設の学校が多かったことは既に指摘したとおりだが、評判の高かったクライスツ・ホスピタルやハリファックスのクロスリー孤児院などでさえ「暗くて息苦しい」と圧迫感をおぼえる生徒も少なくなかったという。尤も、久米たちが生徒側の視線に立って学校の実態を吟味していたかどうかは甚だ疑問である。

(71) 『理事功程』はイギリスの工場併設学校に論及してはおらず、主眼は一八七〇年の初等教育法制定以降のイギリスの教育システム探索に置かれていた。

(72) この点については、拙稿 'The Japanese Encounters with Victorian Britain' (慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』、第一二三号、二〇〇五年三月、八一―八七頁) でも論じているが、まだ議論の余地や検討課題が残されている。また、資本家と労働者の関係についての『実記』の考察に関しては、田中彰『明治維新と西洋文明』(東京：岩波書店、二〇〇三年、八六―九五頁) 参照。